

## 水稲新品種「ニシホマレ」について

内山田博士・西山 壽・橘高 昭雄・轟 篤  
新村 善弘・黒木 雄幸・術藤 信男・上野 貞一  
向井 康・本部 裕朗  
(宮崎県総合農業試験場)

宮崎県総合農業試験場で育成中であった「南海65号」は、昭和54年6月「水稲農林259号ニシホマレ」として命名登録された。福岡・熊本・鹿児島等の諸県で奨励品種に、大分県では認定品種(奨励に格上げ予定)に採用されて普及に移されることになったので、本品種の来歴、育成経過ならびに特性の概要を報告して参考に供する。本品種の育成にあたって適応性および特性の検定のために多大のご協力をいただいた農林水産省及び関係府県の農業試験場担当者各位に対し、厚く謝意を表する。

## 1. 来歴および育成経過

「ニシホマレ」は昭和43年に宮崎県総合農業試験場において、「南海43号」(後のトヨタマ)を母とし、「中国45号」を父として人工交配を行なった。母本である「南海43号」の強稈性と多収性などの長所を保持しながら、父本の「中国45号」から当時九州地方に発病が増加してきた白葉枯病Ⅱ群菌に対する抵抗性の導入をはかったものである。

昭和43年は温室栽培によって交配とF<sub>1</sub>養成を行い、44年は温室密播栽培でF<sub>2</sub>集団を養成し、45年F<sub>3</sub>はほ場で穂別系統として選抜を行い、その後は系統育種法により選抜固定がなされた。その間、昭和47年より「宮系369」の系統番号で、昭和50年から「南海65号」の系統名を付し関係府県に配布して地域適応性を検討してきた。

## 2. 形態的特性

「レイホウ」に比べ稈長は3cm程度短く、穂長はやや長くて1穂着粒数はやや多く穂数はやや少ない偏穂重型である。稈はやや太めでやや剛く、少程度の短芒があり、稈先色は白色、稈色は黄白、着粒密度は中位、脱粒性はやや易である。分けつ期から登熟初期までの葉色はやや濃く、その後の黄化は順調で熟色はよい。止葉は直立して受光態勢はよい。玄米は中形、中粒で、玄米千粒重は「トヨタマ」程度で「レイホウ」よりやや重い。心白・腹白はごく少なく、整粒の割合が高く、光沢よく、外観の品質、検査等級はかなり良い。搗精歩留は「レイホウ」「トヨタマ」並の普通とみられる。食味は「ツクシバレ」にまさり、「レイホウ」「トヨタマ」「ミズホ」と同程度かそれ以上によいとみられる。

## 3. 生態的特性

出穂期は「レイホウ」より1~2日早く、成熟期はこれより3~5日早く、育成地では中生に属する。耐倒伏性は「レイホウ」「トヨタマ」並に強い。いもち病抵抗性遺伝子はPi-aと、レイホウ罹病性菌型(T-2'菌)にM反応を示すところからPi-k<sup>s</sup>に類似する遺伝子をもつと推定される。ほ場抵抗性は、葉いもち病には「日本晴」「トヨタマ」程度の中位、穂いもち病に対しては「ツクシバレ」より強く「トヨタマ」並かやや強くて抵抗性は中位と判断される。Pi-k<sup>s</sup>と類似の遺伝子をもつのでT-2'菌が分布する地域ではかなり強い抵抗性を示す。白葉枯病抵抗性は当初の育種目標であった高度抵抗性はないが、ほ場抵抗性は「金南風」より強く、「レイホウ」並かやや弱い程度であり、中~やや弱とみられる。イネわい化病抵抗性はやや強であり、縮葉枯病に対しては「レイホウ」並のやや弱である。

登熟歩合は高く、収量性は「レイホウ」「ツクシバレ」にまさる。

## 4. 適地および奨励品種採用県

九州地域の平坦及び準平坦地では昭和48年に最高作付面積を示した「レイホウ」が、T-2'型菌いもち病及びわい化の発病、昭和51年の北九州の秋冷害あるいは品質問題などから作付面積は減少し、これに代って福岡県は「ツクシバレ」、熊本県は「トヨタマ」、大分県は「トヨタマ」、鹿児島県では「ミズホ」の作付が増加した。しかし、これらの品種は品質の点が流通面で不利であり、また「ツクシバレ」は穂いもち病にも弱く、更に良質耐病品種の導入が要望されていた。

「ニシホマレ」は昭和50年から4ヵ年にわたって地域適応性が検討されたが、品質、収量性が優れており、安全性も比較的高く、暖地の中晩生種として、特に九州・四国地方の平坦並びに準平坦地帯に広く好適するものと思われる。福岡県では山間・中山間地を除く全県下を対象とし、「レイホウ」「ツクシバレ」「フクマサリ」等に代替できる品種として奨励品種に採用した。普及見込面積は約23,000haである。熊本県は平坦肥沃地を主体とし準平坦地も含めて「トヨタマ」「ツクシバレ」を対象として、約14,000haの普及が見込まれている。大分県は平

第1表 ニシホマレの特性概要

調査場所	品 種 名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	熟 期	草 型	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	玄米重 (kg/a)	同左比 率(%)	玄米千 粒重(g)	玄米 品質	食 味
育 成 地	ニシホマレ	8. 30	10. 9	中 生	偏穂重	84	20.1	296	52.0	104	23.4	上下	良
	(比)レイホウ	8. 31	10. 12	晩生の早	穂重	86	19.3	348	50.3	100	22.9	中中	良
福 岡	ニシホマレ	9. 4	10. 25	中 生	穂重	74	19.7	338	58.0	109	23.9	上下	良
	(比)レイホイ	9. 6	10. 31	晩生の早	穂数	78	19.2	384	53.5	100	23.1	中中	良
	(#)ツクシバレ	9. 7	10. 31	晩生の早	穂数	68	19.6	394	54.2	101	23.3	中中	中
熊 本	ニシホマレ	9. 1	10. 21	中生の晩	偏穂重	83	20.6	335	62.9	96	23.3	中上	良
	(比)トヨタマ	8. 31	10. 21	中生の晩	穂数	81	20.5	345	64.9	100	23.2	中下	やや良
大 分	ニシホマレ	9. 2	10. 25	晩生の早	偏穂重	82	20.0	338	60.7	103	23.7	中上	良
	(比)トヨタマ	9. 1	10. 24	晩生の早	穂数	82	20.2	370	58.9	100	23.3	中中	やや良
	(#)レイホウ	9. 3	10. 27	晩生の早	穂数	86	19.4	365	55.2	94	23.1	中中	良
鹿 児 島	ニシホマレ	8. 31	10. 13	早 生	偏穂重	84	21.3	322	55.6	111	21.9	上下	良
	(比)レイホイ	9. 2	10. 20	中 生	穂数	89	20.6	387	50.9	100	21.1	中上	良
	(#)ミズホ	9. 8	10. 27	晩 生	中間	80	21.2	360	54.2	106	21.0	上下	やや良

注) 育成地は昭和47～53年, 他試験地は昭和50～53年の平均値

垣地の「トヨタマ」「レイホウ」と「ミネユタカ」の一部を対象として、約7,500haの普及が見込まれている。鹿児島県では県下全域の「レイホウ」と県北部の「ミズホ」を対象として採用され、普及見込面積は約7,000haである。以上の4県のほか、宮崎、佐賀、愛媛、徳島、京都等の諸府県においても評価は高く、それぞれ県内の適応性が検討されている。

#### 5. 栽培上の注意

分けつ期から登熟初期まで葉色は濃いが、「レイホウ」「トヨタマ」の施肥法に準じて施用してよく、葉色は濃くても施肥量を減らす必要はない。

耐倒伏性は強いが、いもち病; 白葉枯病抵抗性は十分

でないので、窒素質肥料の過用は避け、また、適正防除に留意する。特に穂いもち病については、「レイホウ」の作付率の低下とともに菌型も変り、抵抗性が低下するおそれがあるので発病の推移を十分注意する。

イネわい化病に強いが、他のウイルス病には弱いので、苗代期から媒介昆虫防除に努める。

登熟日数は「レイホウ」より短いので、良品質を保持するよう適期収穫、乾燥調製に留意する。

#### 6. 命名の由来

西日本の九州・四国地方の平坦・準平坦地帯に広く適応する短強稈、良質、多収品種であり、生産者及び消費者の好評を得る誉れ高い品種であることに因む(西誉)。